

大井第一小学校



同窓会会報13号

大井第一小学校同窓会 発行責任者 津田 照通 2011年4月

○ 第4回ホームカミングデー

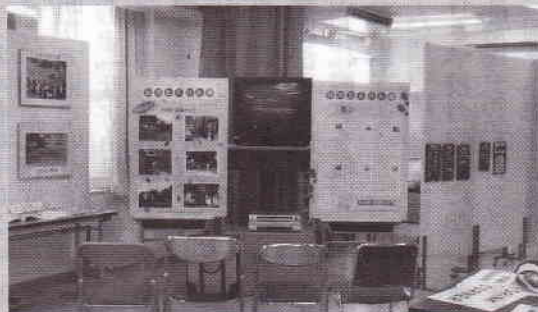
懐かしい「大井第一小学校」に集まろう
鹿嶋神社祭礼の日

10月16日(日) 11時～15時

★クラス会・同期会の集合場所としてご利用下さい



第3回 ホームカミングデー 会場風景



開校135周年記念人文字



全校児童・教職員大集合

開校百四十周年に向けて

副校長 辻松 康晴

平成22年4月に、伝統ある大井第一小学校に赴任してから一年が過ぎました。4月には全校で航空写真撮影を行いました。児童が考案した図柄を基に、カラーカードを持つて全校児童、教職員で人文字を作りました。虹の中を135と書かれた気球が飛ぶ様子を校庭一杯に描きました。

5月には、6年児童企画運営による開校記念児童集会を開催。これまでの歴史を写真とナレーションで学び合いました。同窓会会長さんから、在学されていた当時のエピソードを伺い、改めて伝統の深さを知ることが出来ました。児童たちとともに、伝統を受け継ぎながら、さらに発展させていこうという開校140周年への目標を確かめるよい機会となりました。

学校では、最高学年の6年生が全校のお手本とされるよう、様々な場面で指導激励しています。朝のあいさつ隊、縦割り班のリーダーなど立派に活躍しています。その姿を見ながら下級生は、私たちも6年生になったらあんな風に頑張ろうと思ってくれています。とても素晴らしい姿だと感動しています。

また、三代、四代と本校に通われているという方がたくさんいらっしゃいます。中にはPTAの役員として、同窓会の役員として、子どもたちの健全育成のためご尽力くださっている方もいらっしゃいます。本当にありがたいこ

と感謝しております。
 多くの方々に支えられ、守られながら教育活動が行われています。児童、教職員、保護者、地域、そして同窓会の皆さんと、校長を旗頭にしながら、「チーム大井」として、品川区をリードしゆく大井第一小学校を築いてまいりたいと思います。微力ではありますが全力で取り組んでまいります。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

夢の中の思い出

—喜壽の声 学びの道の霞かな—

旧教職員 S62〜H5年

金澤 壽雄 (理博)

昭和20年の1月雪の降る中を福島の実地から、母と二人で中学受験の為に東京へ。
 途中空襲で燃えている家々を窓の外に見る。

一年ぶりの学校(火の気のない寒い教室、窓ガラスは割れたまま)へ、在京の仲間に加わった。
 毎夜の空襲警報、寝不足の中で迎えた3月10日、10万余の人々が焼死、溺死した東京大空襲。

父親の兄一家、母親の妹一家全てが全滅、遺体は不明、工場を一部休業、一日中さがして江戸川に溺死の母の妹一家だけが見つかった。
 路面は足のふみ場もなく横たわった遺体。川面には水に浮く溺死体、こんな惨状の上に丸く大きな太陽が煙の中に浮いていた……。

(叔母の二女は脈があったが凍死—以

下略—

「アレお父さん、お母さんも一緒……なんだ、みんな一緒にお空にいたんだ……」(国語教材「ちいちゃんのかげおくり」) ハッと気付いた3年梅組の教室、思わず手でぬぐった目の涙、そうだ理科ばかり教えていた私が初めてもらったクラスの国語の時間だった。
 子供達の顔が、「どうしたの?」と問うていた。

昭和25年の夏、猛暑の多摩川、浮いていた子供を岸に上げて生まれて初めての人工呼吸を試みる。
 吹き出す水溶物を取りつつ、どの位だったか、もどす物と一緒に声が出た。助かった! オヤ! 私の横の子は3年組の男子、手足をバタつかせ、泣き声と大きな呼吸、囲りで見ている子供達の真剣な顔々、思わず「サア早く帰りなさい。今日は土曜日だよ。」「何だ生きているじゃないか。」と言った声と一歩も出てこなかった偉い方。……こんな私を見つけた。(省略)

良い時に水泳と救助法を身につけていた等々走馬燈のように脳裏を横切っていた。(その時私は57才)

そうだ工場主だった親の跡も継がず、好きな化学の道に行き学校の先生になり、海洋学や有機合成化学を学びつつ、戦争で迷惑をかけた国々へ奉仕活動の真似ごとをしてきた自分がここにいます。早いもので青少年活動等を通じてもう60余年、昔は「青年会館」(あまり使用はしなかったが)まで……昨年改築され名前も変更された。でも、つわものどもが夢の跡とは思いたくない。

今は若い方々と薬物化学と海の魅力を学んでいる。

”町たんけん“

旧教職員 H7〜H15年

飯島 朋子

大井第一小学校を離れて8年が経とうとしています。

楽しかったなあと思いつくことの一つが、2年生の生活科の”町たんけん“です。

大井第一の学区は広いので、子ども達にとって未知の部分も多く、滝王子通りで分けて二日かけてやりました。事前に自分の家の周りの見所を発表してもらいます。すべり台のおもしろい公園とか、たぬきのいる家とか、蛇のように細くて長い道とか、大木とか、子どもの目線で私も知らないことをいろいろ教わりました。

当日角々に立って見守っていただく保護者への依頼状作り、それに基いて分担表作り、雨天延期の場合の対策、そして地域の下見、子ども達が立ち寄る来迎院・光福寺・西光寺・鹿嶋神社へのご挨拶など、準備はたくさんありましたが、グループに分かれての探検活動の楽しかったこと!!

当日は、



番外で友達の家を尋ねたり、自分の通っていた保育園に友達を連れて行ったり、通りかかったお宅のぐみの実を枝ごといただいたり、卒業生のお母さんからあげはの幼虫をいただいたり……

全員が無事もどってくるまでは、はらはらしましたが、自分達で地図を持って自由に回る”町たんけん“は、2年生の世界を広げ、地域の方々と触れ合う大きな体験でした。「何してるの?」「町たんけんです。」「がんばってね。」と知らない大人と話すこともたくさん経験しました。地域の方々に支えられていることを実感する活動でした。

「大井第一小学校」と聞くと池上通りに沿って建つあの校舎といっしょにそれを取りまく大井の町と、子ども達の表情やしぐさを懐しく思い出します。元気でいますか。

思い出いっぱいの大井第一小学校

旧教職員 H13〜22年

國米 典子

昔、映画にもなった「時代屋の女房」で有名な三ツ又の交差点を横目に見て、池上通りを進むと、多くの緑に包まれた大井第一小学校が見えた。

「何て素敵な学校だろう。」
 これが、私の第一印象である。

初めて担任したのは、5年生。とても元気で運動大好きな男子と笑顔のかわいい女子に囲まれて、毎日楽しく過ごしたことをついこの前のように覚えている。ところが、昨年末に区役所から

「成人した卒業生にひとことをお願いします。」という手紙が届き、「えっ、まさかあのかわいかった子どもたちが……。」と思った。指を折って数える、確かに成人式を迎える歳になっていくことに気付いた。そして、本棚にあった卒業アルバムを見て、思ひ出に浸った。「どんな大人になっていくのかな。」などと考えながら……。



月日の経つのは、本当に早いものである。でも、大井第一小学校では一緒に笑ったり、一緒に悩んだりしたかわい子子どもたちと、いつも熱心な保護者の皆様、そして温かく見守ってくださった地域の方のおかげで、一年一年大変充実した日々を過ごすことができた。直接関わった子どもたちは4クラス、約150人であるが、兄弟関係や委員会、クラブ活動などで、本当にたくさんの子子どもたちと関わる事ができた。今では、この関わりで得た様々なことが私の宝物になっている。

最後に、私が大井第一小学校の中で一番大好きだった場所を紹介する。それは、タブの木の下である。特に炎天下の体育で、汗をかいいた後のタブの木の木かげは、天国のように心地よく、自然と気持ちが悪くなった。この木の下で子どもたちといろいろな話をしたなあ。これからもこのタブの木の下で、いろいろな先生や子どもたちが、素敵な

思ひ出を作り、歴史を刻んでいくのだろう。

巨星、墜つ

旧教職員 S21〜35年
昭和13年卒 松崎 澤子

平成17年10月、大井第一の130周年の祝賀会で、丸いテーブルの私の目の前に坐っていらつしやった先生。「どなたかしら？」と思ってお顔をジーツと見ていましたら、何と迫田先生でした。実に「にこにこした好々爺。」という言葉がピッタリのおじいさまになっていらつしやいました。

私が大井第一に勤務しておりました頃は、「とてもかわい先生」という印象が深く、傍にも近づけませんでした。その頃、男の子達からは「あの先生、すごく頭がいいんだぞ!!」という評判でした。何しろ夏休みに故郷の鹿児島までお帰りになる時、(今よりもずっと長い時間かかりました)トランク一杯に詰めた算数のむずかしい問題を、ずーっと作っていらしたとか。たしか80才になられてからも、漢字の検定テストを毎年受験され、一級をお取りになられたとか……。伺って、もうビックリ。私など先生と年齢が近いのに何と恥かしいことかと思っておりました。

また、先生は音楽もお好きなようでした。子供達の音楽会では最後に職員全員が斉唱することになっておりました。或る年、



光。

「森の水車」を歌うことになりました。ところが、私の伴奏と三連符の所が「合わないぞ。」と指摘された思ひ出があります。箱根の林間学園では朝の澄みきった空気の中で子供達と「箱根の山は天下の険」を斉唱した時のこと。ふと、先生は落ちていた小枝を拾われてタクト代わりにすてきな指揮をして下さいました。

時には若い先生方とテニスをなさっておられたような記憶があります。このように勉強以外にもいろいろなこと、お出来になって「すばらしい先生だ」とだんだん近づけたような気がしていました。

「140年の時にもまた是非、お目にかかりましょう。先生、それまでお元気でいらして下さい。」と申し上げたその140年も近づいてきております。

1月24日、先生の訃報を伺いまことに残念であり、心からのご冥福をお祈り申し上げます。(合掌)

迫田先生

昭和34年卒 森 秀雄

恩師、迫田文雄先生が亡くなられました(享年90歳)。第一小在任7年間のうち2年間私達の担任として教鞭を執られ、やがて公立小学校から進学教室へと転じ名物教師として名声を得られた、異端と呼ぶことが相応しい先生でした。先生の訃報を聞き、50年以上も前の6雪の授業光景がハッキリとした現実の思ひ出として続いていた私の第

一小の時代は、遠い過去のものになってしまつたようです。

私が3年生の時です。月曜の朝礼、鹿児島から赴任された先生は白いシャツ姿で朝礼台から歯ブラシを右手に掲げ、ニコニコしながら大きな声で「歯は表と裏をしっかりと磨きましょう」と2000人の生徒に呼びかけました。後年、講演会で聴衆を引き付けるには「最初の3分が大事だ」とおっしゃられていた通りの記憶に残る初登場でした。2年後、5雪の担任となられた先生はとてつもない情熱、熱意で私達を厳しく鍛えることになりました。

授業が始まります。先生が険しい顔の時、生徒は緊張します。黒板には万葉集の詩歌が書かれ、右の壁には日本の白地図を貼り、全員の名前の付いたピンを太平洋に置いて、100点を取る度に全国を1県ずつ進んでトップ生還のご褒美はリングです。算数問題では、答が出る待ち構えている先生に駆けていきます。出来た順にナンバーがふられますが、間違えるとノートいっぱい大きなV(バツ)が。公立小学校で生徒間に競争を持ち込んだわけですか。「自由自在」、「算数5000題」、「鶴亀算、旅人算、流水算、書いてあるだけで懸命に問題を解いている6雪の教室を俯瞰している今の私と、焦っている小学生の私が臉に浮かびます。ふざけている生徒にはチョークが飛んできます。時折、頬がジンと痺れる愛情表現もありました。文字にすると張りつめた緊張感に満ちた授業にみえますが、感受性の乏しい私は、何も感じず、当たり前前のよ

うに受け止めていました。印象に残っているのは授業から脱線したときです。海軍に召集され、見張り役の時に監視塔で読んでいた万葉集は艦艇と共に海に沈んだ話。また、ある時は教室にオルガンを持ち込み、大好きな啄木の短歌「たわむれに」を歌い、「すずらん」「鎌倉」「七里方浜」数々の歌を合唱しました。

関ヶ原の戦い、薩摩兵の奮闘と少人数になつての帰還、それを伝える長い長い「島津軍、関ヶ原敵中突破の歌」を吟じるように感情込めて歌う先生。薩摩の血と気概を受け継いでいることを羨ましく思ったりしたものです。

故郷、鹿兒島で生徒達と作ったセメントの地球儀の話、楽しそうに生き生きとその情景が浮かびます。女子は男子を〇〇くんではなく〇〇さんと呼ぶようにさせたり、ソフトボールに熱中し授業をつぶして2時間以上校庭を占拠したこともありました。

卒業証書授与の時男子1人が名前を呼ばれません。ミスです。先生は慌てて教員室に戻って彼の名を書いてきました。その間、彼は壇上でまちはうけです。下級生からは「あの人落第したのかな」の声が。

振り返ると様々なことが思い出されます。当時の大井第一は受験第一、授業はすべて中学受験を軸に行わ



れ、模擬面接は校長先生でした。無知な私はなんの疑問も持たず勉強に励み、進学教室に通い、先生の力7割、実力2割、運1割で多くの仲間と共に合格することが出来ました。いつも分厚い靴を提げた怖い顔の先生でしたが、卒業後のクラス会での先生は、終始笑顔で、教え子の成長を穏やかに喜んで見守ってくれていました。

私達の卒業数年後、当時NO.2だった四谷大塚進学教室に教務部長として転身し、日曜テスト、予習シリーズ展開の中心となつて「日進」を抜いてトップの座を築きあげました。その後、独立し進学教室「秀優舎」を立ち上げ、引退後は受験本の執筆、講師、漢字検定1級合格と、飽くことなき情熱で走り続けたのです。

ある時、先生にお聞きしました。「先生の生き方は？」答えは「今を一生懸命生きるのだ。失敗してもこの程度で済んで良かったと言いつけさせる」。その言葉のとおり意欲満々で、失敗を恐れず常に前向きで挑戦し続けていました。教育にかける情熱、密度の高い授業、迫力のある迫田節はもう聞くことはできません。もう一度教室であの授業を受けてみたかった。

ご自宅に何度も遊びに行った第一小での三人の担任、池田秋子先生、新堂芳郎先生、迫田文雄先生、全員鬼籍に入られました。生徒の成長を見つめ、時には叱り、ほめたたえ、万葉集、啄木を愛し、故郷、鹿兒島を思い、唱歌を口ずさんでいた規格外の存在、迫田先生を忘れることはできません。

原(旧姓・菊池)登志先生 からのお便り

(平成23年1月21日付)

私が大井第一小学校に赴任したのは昭和13年です。最初に担任したのは5年生で5学級ある中の梅組(S15卒・54名)でした。昭和15年には1年生(S21年卒)を担当しました。

最近そのクラスと同級生では「歴史散歩の会」を作り14名が参加した、と生き生きとした消息も頂きました。今でもその頃の方々からクラス会のご招待を頂いており有難く思っています。体調に自信がなくこの数年出かけておりません。

着任当時は木造の古い校舎の2階からは品川の海が見え、沖行く船も輝いて見えました。入学式の頃は校庭の桜も満開になり、千数百人の児童が整然と行う運動会では、観覧席の教室が父兄で溢れていました。

地域と一体になった教育は当時から優秀校との評判も高く、現在もその伝統が引き継がれていることは同窓会の大きなお力があったからこそと思っております。そのお陰で母校との交流を世持つことが出来たことを深く感謝しております。

長い人生の中には楽も苦もあります。関東大震災、太平洋戦争等々苦しいこともありました。長生きしたことで良いことも沢山ありました。その一つが大井第一小学校時代でした。その後疎開先の埼玉県で復職し、無縁の地で子育ての苦労もありましたが、教え子や

父兄、地域の人々との交わりも深くなり、定年まで勤めました。

昭和57年に蓮田市で提案された「視覚障害者への朗読奉仕」のボランティア活動には直ぐに参加し、市の広報、その他の読物を朗読しテープ2本に仕上げ、毎月対象の方にお届けしています。現在も続けておりやがて30年になります。高齢になりいささか自信がなくなり退くことを考えています。

6人兄妹の末っ子として生まれ既に兄、姉は亡くなりましたが、私は未だ健在で今年の2月には92歳になります。今も一人住まいで頑張っています。近所には子や孫も居て不足はありません。

毎月2回行われるグループ・ホーム(自立独居老人の集まり)では、音楽、美術、体操、会話等々のボランティアの方々(60・80代)が来て相手をして下さいますが、たまには古い知恵が生きることもあり楽しい一日です。

いろいろ暗雲立ち込める現代の教育界ですが、同窓会が今後もこの素晴らしい大井第一小学校の伝統をお守り下さることに、皆々様のご多幸を祈ります。おそらくこれが最後のお便りになるでしょうが、頂いた命を大切に過ごしたいと思っております。

故原十郎元寛先生のこと

(原登志先生のご主人で)

通常原十郎先生と呼んでいた

夫は長野県木曾福島に生まれ、4歳の時父を亡くし、大勢いた兄弟も次々

に亡くなり母親との二人暮らしで苦勞したそうですが、中学卒業後東京の叔父を頼り青山師範に学び、昭和9年卒業しました。

その年の4月、初めて着任した大井第一小学校は十郎の生き甲斐でした。最初担任したのは2年竹組(S14卒・64名・津田同窓会会長のクラス)で、大平洋戦争で大井第一小学校を辞めるまでの10年間の教員生活だけが東京で唯一の教員生活となりました。

教員を辞めて地元の田野井工場に移りましたが終戦で退職。その後混乱と激動の5年の間、建築、印刷、製本などの多くの仕事を経験し、最後に出版界に入りました。

そして「少年月刊誌」を作り、吉川英治、尾崎士郎、西条八十、諸先生の原稿集めや、川上哲治氏への取材、諸挿絵画家との交渉などで多忙な変化の多い日々を過ごしました。この仕事は面白かったようです。

”何時かは東京に帰る”という希望もありましたが、昭和26年埼玉県で再び小、中校の教育に携ることになりました。終戦前後社会人として体験した多くの苦勞が教育の面では大きなプラスとなり、その豊富な経験を生かした現場での授業は、教育界だけでなく、父兄、地域でもたいへん評判が良かった様です。

定年後は書道教室を開き、少年、少女に「心」と「技」等も教えていましたが、若い頃からスポーツマンで健康そのものだった十郎の体は思いもかけぬガンに侵され、8ヶ月の入院後、昭和63年

8月3日永眠しました。

自宅の壁には、嘗て大井第一小学校時代新進の画家だった林部先生が描かれた若き日の十郎の肖像画が今も飾られています。

林部先生はその後ヨーロッパにも渡り、日本を代表する画家として活躍されたと聞いています。

思い出すまゝ

昭和21年卒 田中 茂雄

私が昭和15年入学した時の正式学校名は、「東京市大井尋常小學校」と言いました。翌年学制が変わり、「東京市大井第一國民學校」と名称が変わり、大正時代から続いた教科書も、全部変わりました。

校長先生は河原耕藏先生、担任は菊池登志先生でした。1年2年は男女共学ですが、3年からは、男子組女子組とに別れました。

学校の敷地は現在の半分でした。校舎は現在の様な形で、旧校舎と呼ぶ木造二階建の校舎があり、現校舎海寄り半分位の所で、大井町方向へ直角に折曲っていました。

又、その大森方向へも新校舎と呼ぶ木造2階建の別棟校舎がありました。新校舎裏に幅2、3米の小道を挟んで学校園と称する畠がありました。現在の校庭は、この学校園、新校舎跡地、それに以前からの校庭を、合せたものです。

学校前の池上通りと、瀧王子通りの交叉点にバス停があり札幌と言います。

た。大井町より大森、池上方面に行く池上通りには、バスは走っていませんでした。大井陸橋は当時なく三ツ又旧道は狭く、バスは通れない為です。

それで大井町駅を出たバスは、京浜国道へ出て立会川より学校横の坂を登り、大井警察の前を通り、原小学校入口を直進する「馬込行」と左折する「大森山王行」の、2系統がありました。経営する会社は東急でなく、城南乗合自動車株式会社と言いました。車体の色は今と同じ白地に赤帯でした。戦争の為ガソリンの供給が無くなり、木炭バスとなりました。

通学路は、表通りの主要道路を除き、ほとんどの道は未舗装の砂利道でした。各家々の塀や垣根は、ブロック塀でなく、生垣、竹垣、板塀でした。木が多く、団栗等が落ちていました。

又、所々で落葉焚き等も見られました。冬には道の端の土の柔らかい所に5糎程に伸びた霜柱を、サクサクと踏みしめながら通学したものです。戦争が激しくなると、登下校は集団で行く様になり、段々と軍隊調となつて行きました。

大井第一小学校

…ある時代 その五

昭和22年卒 山上 伸也

「関根君」

関根君は、豊田に引越した時点で新規参入してきた同級生の一人である。静かにか細げで弱々しかった。私は好感を持ってなんだかんだ話しかけた。

そんな日々が何日も続いたが、満足するような返事は一度も返ってこなかったのに私は腹を立てた。私は馬鹿にされているって。

そして意地悪めいた対応をするようになった。関根君はただ黙っているだけだった。眼にいっぱい涙をためて悲しそうに…。涙を見てから意地悪はやめた。

その当時、あまりの空腹に胃の薬、肝油、梅肉エキスなど口に入る物なんでも親から送ってもらい、こっそりと腹の足しにしていたが戦局悪化でほとんど手に入れるのが不可能となっていた。

ある日、関根君は大井の家から送ってきた大事な大事な胃の薬と梅肉を私の前に差し出して、小さな聞き取れないような声で何か言った。私はその時悟った、この人は喋ろうとする意思がそのまま口に出てこない。返事をしようとしても時間がかかるのだ。私を無視しているのでも反発しているのでもない。私はものすごく悪いことをしたと心の底から後悔した。

人の心がわからなかった自分が恥づかしかった。以後二度ときつい言葉は言わなかったし意地悪もしなかった。むしろ庇う様になった。それは卒業まで続いたし、会うことも無くなってからも、時たま思い出し心配した。

卒業から40 幾年経って初めての同窓会、集まった皆の中に関根君をみつけた。



私は無性に涙が出て止まらないのに困った。

七月のある朝、眼が覚めた私の布団の上に1ミリにも満たない小さな小さなクモの子が這っていた。緑色の寶石のように美しかった。「朝蜘蛛は縁起がよい」と祖母から聞いていたことから「きっと弟が生まれたんだ」と思った。その日7月12日は私の誕生日でもあった。父は4度も戦争に行っている。

〔8月15日〕

その日はドンヨリした薄晴れだった。正午に天皇陛下の重大放送があるというので、分教場の校庭に1台のラジオを正面にして2列に整列していた。やがて始まった初めて聞く天皇陛下のお声は、ラジオの性能が悪いせいかカン高くよく聞き取れず、おっしゃる言葉の意味がわからなかった。やがて、佐久間先生が泣き出し神田先生もすすり泣いて、私は重い頭の中で戦争は負けたのかな!?と思った。私は気が抜けたようになつた。それまでのやがて大人になつて「お国の為に戦う」としていたその目的が、張り合いが、突然何処かへ消えてしまった。しかし、心の底の何処かにホッとしたような気持ちが起こったみたいだった。8月15日以後の疎開生活は変わった。空襲の危険が無くなつたので自由に遊びに出られるようになった。敗戦とはいえ平和になつたので、先生も本来の教師と言う使命が帰ってきたのだらうと思う。でも教科書など全く無い状態だったので、あぜ道での運動会や向こう岸の野猿峠への

遠足やら、使う機会の無かつたクレヨンでの写生など…。

平和の中での久しぶりの面会が会つた。戦争に行っている父を除いて家族全員、祖母・母・弟・そして母に抱かれた新しい弟。気持ちよく晴れた浅川の川原の面会は、殆どの生徒のすべての家族が集まつてそれは賑やかなものだった。精一杯のご馳走の並んだ昼食。お正月とお祭りと同運動会が、一度に来たような…。生徒も家族も興奮していたし、幸せを満喫していた。敗戦とは言いながら戦争が終つてよかつた。平和と何と素晴らしいんだろうと実感していた。生徒も家族もみんな心から笑つていた。2年ぶりに会つた弟は、私の顔を見ると「お兄ちゃん。」と、一言話しかけても恥ずかしそうに微笑んで黙つていた。私は、なんて可愛いんだろうと思つた。

〔随想〕「シャッター通り」

昭和23年卒 土肥 義尚

我が家は第一小学校の近くにあつて、池上通りを歩いてJR大井町駅まで丁度1キロ程である。戦前の池上通りには商店がまさに櫛比しており、時には縁日の夜店も出て母らとの夕食後の散策も楽しかつた。しかし、その通りが、ことに大井本通りは今や見る影もない。理由は色々あるが、第一は店主の高齢化と後継者難か。次いでスーパーやコンビニ進出の影響も大きい。客足はどうしても品揃えの豊富な大型店に流れる。たしかに便利ではあるが反面

良いものは入手困難にもなつた。更に多額の相続税支払いのための土地売却や重労働なくして安定収入の得られるマンション経営に転身した店も多い様だ。

数えれば驚いたことにもう半世紀も前のことになるのだが、私の学生時代（昭和20～30年代）にはまだまだほとんどの商店が健在で、次は何屋さん、何屋さんを目をつぶつても思い浮かぶ程で楽しく歩けたものである。

幸い三ツ又商店街は今も変わらず健在で、色々店の交代はあつたにしても昔ながらの活気があつて嬉しい限りである。ただ、閉店時間が早くなり、ちよつと遅くに通ると本通り同様のシャッター街になつてしまふ。

やはり商店街は明りが煌々と輝いて商品が美しく並んでいてこそ魅力があり、人を勇気づけ喜びを与えてくれるものだ。寒々としたシャッター街を見るにつけ過ぎし日の懐しい街並みが臉に浮かぶ。

(平成23年1月 記)

ホームカミングデー

昭和33年卒 堀澤 末治

昨年引き続き、午後1時すぎ登校し、校門を入つた前で生演奏と校歌に迎えられるました。

昨年は一人で登校、下校。今年は、地産の友に声をかけておいたので、3人でゆつたりと、のんびりと、歴史資料、校庭、樹木、プールを見学して3時に下校。そして御輿に付いて鹿嶋神社境内

へ、再びタイムスリップ。

歴史資料展示室では発見が。それは昭和33年3月25日発行の「大井第一」の校報である。中をめくると、卒業を記念してのページ、卒業生全員が将来への希望、夢を書きつづる「一言コーナー」である。3人で自分を見つけて、爆笑するやら、誉めるやら、感心するやら、情けないやら、でも良いね。これが、ここが、その後の50有余年のよき時代へのスタートラインの様なうれしいものでした。その場で係りの方(森商会様)に複製のご無理をお願いしました。

数日後、地産の友より待ちに待つた複製校報が送られてきました。改めてうきうきと再読、またまた懐かしいことが書かれたページに遭遇、在校生の作文、詩を載せた、「こままわし」とタイトルされたページの詩。

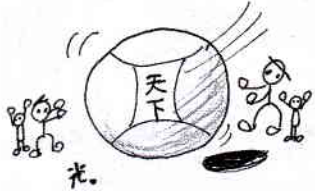
『てんかとり』

ならんで待つているみんなの目がボールに集まつている
僕の番だ
だん丸のように飛んでくるボール
中略

やっとうけた
今度は投げ返す番だ
ビュッ
ぼろりと相手の手から落ちた
しめた 天下をとつた

4年生 堀井勝美さんの詩です。懐かしいなあ！ てんかとり。
寒い日の校庭で勝ちたいと思つて順番を待つ自分と仲間たち。始業前、昼休み。バレーボールが校庭に幾つも転がっていた。そのボールでキャッチ

- 1. 相手の手からボールが放れるまで動いてはいけない。
- 2. 投げられたボールを捕れなければ負けとなる。
- 3. ボールを投げるときは片手投げは禁止。
- 4. ボールを受ける側の左右、上、前に対し手の届く範囲に投げなければいけない。
- 5. 受けたボールを手で上空に弾いて、頭の上でドリブルすれば相手の近くまで前進することが出来て、相手の目の前で捕りづらいボールを投げることが出来る。
- 6. 1人で5人連続勝ち抜きをすると、天下人となり、ゲーム仲間の中から1人を選んで家臣(子って呼んだかな)とする。
- 7. 天下人になると、家臣が相手と対戦し、家臣が負けるまでゲームを見る。
- 8. 家臣が負けると、天下人の出番で、天下人は相手に連続2回負けなければ天下は守れる。



に回転をつけたり、名前の付いた投げ方もあった。地面すれすれのストレートを投げる安藤君(月)、高速スライダの小笠原君(松)、確か岩石投げと呼んだストレートを投げた佐々木君(松)、岩石投げカーブの渡辺君(竹)、山本君、大場君、北川君とかは強かったなあ。梅組の野田君、倉橋君もいたかな。4クラスで合計20人ぐらいかな？それは楽しく、自分より強いと思う友に勝ちたい一心で、真剣で、迫力すらあった。負けると、順番が回ってくるまで長く感じたような思いがある。この天下とりゲーム、いつの時代から有ったのか？誰が始めたものか解りませんが、大井第一小だけのボール遊びのような気もする。

今でもありますか？ 卒業生は誰でも知ってますか？

ドッチボールのルールを無視した「メチャぶつけ」と呼んだボール遊びも良くやったなあ。

ホームカミングデー実行委員の皆様のご尽力に感謝いたします。

「ホームカミングデー」の報告

ホームカミングデー実行委員会

平成22年10月17日、鹿嶋神社の大祭の日に合わせて第3回ホームカミングデーを開催した。好天に恵まれて祭りの人出は多かったが、同窓会のこの催しについては残念ながら余り大勢の来場は見られなかった。来年はもうやめても良いのではとの声も一部にある様で、開催当事者の一員としてはマンネ

リ化した展示、また内容の凡庸さなど改善すべき点が大いにあると反省している。

尚、今回は昭和30年卒業の木村親光さん主宰の同窓生を中心とするウクレレグループ「MAHINEFRINDS」数名の演奏も行われ、津田会長自らスチールギターを担当され、プロの女性シャンソン歌手、河西和さんらの賛助も得て、ハワイアンや懐かしい唱歌が披露された。

ところで同期会には学年により活発な年度と、全くやらない年度がある様だ。外部からみていると、優れたリーダーシップを持ち身軽に動く幹事のいる学年や、また6年生時(卒業年)に限らず低学年時にでもすばらしい先生に恵まれた学年などは、その先生を中心によく集まっている様だ。一方、同窓会については一般に自分の上級は5年、下級は3年位までしか知らない人がほとんどであり、同窓会への関心は希薄である。私自身を顧みても若干とも関心を持ったのは40歳をはるかに過ぎていた。

本校は130余年の歴史を持ち、今やそれなりの風格も自ずと備ってきていると思う。これを次代に



しっかりと継承させてゆくこともOBの大切な務めであろう。ホームカミングデーは今迄知らなかった人々との交遊の契機として大いに役立つものであるから、人の輪を拡げ、人の和を深めるためにもさらに有効に活用して頂ければ幸いである。

.....

同期会報告

昭和24年卒同期会

昭和24年卒 渡辺 功

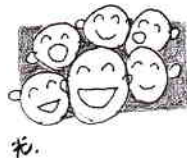
平成22年11月27日(土)に「竹むら」において、同期会を開催いたしました。28名の参加者でした。

昭和26年卒同期会

昭和26年卒 栗原 良平

快晴に恵まれた平成22年4月25日(日)2年ぶりに同期会が開かれました。今年度は丁度我々の干支(72歳)です。まだまだ平均寿命には届きません。会場は東京のど真ん中お台場で、40階にある部屋です。話題の東京スカイツリーもよく見えました。

我々同期は松組、竹組の2組でしたが現在連絡の取れる仲間は64名です。当日は18名の出席をいただきました。京都から来てくれた方もいました。感激です。昔の都会育ち(大井町育ち)も現代の都会の会場へたどり着くのは大変でした。



会が始まれば話に花が咲き、昔に戻って楽しい時間を過ごすことができ、あつという間の3時間でした。話題も体調のことには皆さん関心があり、これからは養生しながら、元気に再会を約束して散会しました。



梅の会に乾杯

「古希を迎えて25回」

昭和28年卒 萩原 廣

終戦直後の昭和22年、私達は大井第一小学校に入学しました。しかし、戦争で消失した校舎は未だ出来ておらず、浜川小学校の校舎を借りての授業のスタートとなりました。学校の入口には大きな太鼓が置かれており、ドンドンと授業の開始終了等は全て太鼓の合図で行われていました。

やがて第一小学校の校舎も少し出来て間借りからは脱出しましたが校舎の容量の関係から午前・午後と分かれた二部授業となりました。

昭和28年に卒業した6年梅組の生徒達57名(男子32名女子25名)は4〜6年の3年間はクラス替えもなく、いじめもなく、受験勉強もなく、皆仲良く遊び

に没頭できました。小学校後半の年齢と言えば物心も付き脳の記憶の最下層には適度の刺激を与えれば蘇る共通の思い出が沢山つまっている、社会で出会った最初の友達です。

卒業してから32年目の昭和60年、私達が44歳の時に熱心な女性の努力が適い第一回のクラス会を開催後、5年目の平成2年には、この会の名称を「梅の会」としました。卒業後はそれぞれ道を歩み続けてきましたが、当時のメンバーの様子を伝える為の小冊子「再開」を発刊しました。

その後、平成9、13、14年は残念ながら「梅の会」は開催されませんでした。が、その他は毎年開かれ、本年は25回目となりました。そして私達も満69歳の「古希」を迎えることになりましたが、残念なことに既に物故者が6名(男性4名女性2名)です。

今後の体力・気力の衰え等を考えてこの際、第2回目の小冊子「梅の会」に乾杯「古希を迎えて25回」を発刊することにしました。目的は25回も続いた「梅の会」の活動記録であると共に分散傾向にある記憶並びに写真等を集中させる事により、社会で出会った60年来の仲良し達の旧交を温める縁の一助となればと考えたからです。

昭和32年卒業生同期会

昭和32年梅組卒 安田 央

私たちは、平成22年8月に同期会の開催を企画し、代表幹事望月静子さん(竹)の骨折りで11月13日(金)大森東

急イン宴会場を予約することができました。これに伴い9月下旬、卒業生5組24名のうち住所が判明している95名に幹事田坂能彦さん(松)、望月さん(竹)、私(梅)、松崎伸典さん(月)、山田勝弘さん(雪)連名の案内状を送付し、32名の方々から出席のご返事をいただきました。また私たちの思い出の恩師としてご案内した松崎滯子先生からも出席の旨ご快諾をいただきました。

当日は、午後6時の開催を待ちきれず、数多くの方が30分以上前から集まる盛況ぶり。その中には、遠く長野市から参加した藤井雅晴さん(梅)や同級生同士で結婚した石田さん(松)、田坂さん(両夫妻)の笑顔もありました。

配席は、望月静子さん発案の出席者自身によるクジ引きでの席決めで、全テーブルとも別クラスを交えた顔ぶれ。

松崎先生はじめ出席者は、山田勝弘さんの軽妙洒脱な司会進行に誘われて心に思うまま近くを語るとともに互いに昔を思い起こしつつ自席で熱心に語り



合う等、終始熱気あふれる宴となりました。

終盤では、竹組田坂紗久子さん(旧姓・林)、直井幹夫さん、雪組中島紘子さん(旧姓・中村)、新田好恵さん(旧姓・斉藤)が、佐治先生作曲の歌の数々を披露しました。53年ぶりにもかかわらず歌詞と振り付けを見事に思い出して歌いながら踊る姿に、会場内は一気にタイムスリップ。まさに当時の楽しさと懐かしさを存分に思い起こす一幕でした。

そして最後は田坂能彦さんと平林達哉さんの指揮で全員が校歌を大合唱し、盛況のうちに閉会しました。大変楽しい一夜となりましたが、これも快くご臨席いただいた松崎先生のお陰と、深く感謝いたしております。

なお、幹事一同、今回は海外在住者の一時帰国等に合せて、2〜3年後に開催したいと考えています。

(お問い合わせ先)

電話・03-3771-1386

安田 央

e-mail:rou-hiro@cts.ne.jp

半世紀ぶりのクラス会

昭和42年雪組卒 中村孝子 (旧姓・熊谷)

平成22年5月15日(土)の夕方5時から、大井町アトレの「京辰」に於て昭和36年入学の1松クラス会を開きました。

2年前の同窓会の席で、ひよんなことから、1・2年次松組のクラス会を開こうという話が持ち上がり、有志でま

ず、名簿作りから始めることになりました。

卒業時の各組の名簿は現存しても、1・2松の名簿はありません。セピア色のアルバムから、2年の遠足の集合写真を見つけました。48名の米粒大の顔を虫めがねで拡大し、名前を思い出しました。その中の33名の住所が確認でき、早速、クラス会の案内とその写真を添えて送りました。

なぜ、1・2松のクラス会なのか？人生で一番最初の学校生活におけるクラス。担任は、笹井透先生。温厚で几帳面で、やさしく、温かく、1年生である私達を見守り、育んでくださいました。ですから、私達も安心して、学校生活の第一歩を踏み出した、思い出深いクラスだと思えます。

会には、残念ながら、笹井先生は、欠席でしたが、当時の1年生、男子5名、女子6名、計11名が集まりました。

皆にとっても、1・2松のクラスは印象深かったようで、友達とのつき合いなど様々なことが語られました。

笹井先生が足を骨折され、お休みされていた間、私達松組は、竹から雪組の4組に分かれて授業を受けていた



ようです。(残念ながら、私にはその記憶はありません。)等々。

皆の断片的な思い出を繋ぎ合わせると、当時間が蘇ってきて、懐かしいひとときをすごすことができました。

最後になりましたが、笹井先生と皆様のご健康をお祈りし、この会のために尽力された、同窓会副会長でもある井上幸子さんに感謝し、筆を置きたいと思えます。

振替用紙の通信欄より

○私は昭和七年の卒業生。30年前、竹組クラス会を大井町で開き、学校にも行きましたが、ほのかに昔の匂いが校舎に残ってゐたように感じられました。伝統ある学校です。

(S07年竹卒 北川 和雄)
○大井町での思い出は鹿嶋神社のお祭りの境内でお神楽のひよつとこのおどけた踊りと祭りばやしの笛、太鼓の軽やかなリズムなど。ああ もう一度聴きたいな!

(S11年雪卒 磯邊 澄子)
○大井第一小の思い出や歴史、楽しく拝見しました。「会報」の編集、ご苦労さまです。

(S13年竹卒 荒木田 清瀬)
○12号の表紙写真「鹿嶋神社の素人すもう」をみて亡祖父友吉がここで「小結 八重車 友吉(ヤエグルマ トモキチ)」の名で土俵に上がっていた事を亡父より聞きました。なつかしい思い出 (S13年月卒 榎本 勉)

○母校の御繁栄を心から御祈り申し上げます。

(S14年雪卒 阿部 久美子)
○母校のますますのご発展。とても嬉しいです。感謝。

(S15年梅卒 佐藤 一美子)
○昨年、小林俊作君が他界されました。5月26日、月組のクラス会をやりましたが、年令から来る具合の悪い方が多く、3名のクラス会になりました。

(S15年月卒 代田 益穂)
○おかげ様で元気で楽しく暮らしております。(S16年梅卒 田中 和子)

○前にも書きましたが「振替用紙の通信欄より」が一番楽しい。多くの人が記載され、同年代の人があり親しみがあります。同期会報告もよし、多くの方々に出でいただき関心を高める様にして下さい。親しみある会報を!! (S18年月卒 小谷 清)

○いつもお世話様になり、ありがとうございます。10月17日、久しぶりの友を誘って出席します。

(S18年雪卒 石川 朝子)
○石渡欣久先生の御住所、電話番号を教えて頂き有り難うございました。先生と電話で長い事楽しくお話し出来ました。本当に有り難うございました。

(S19年月卒 山内 由子)
○S23年卒の土肥様、なつかしく拝見しました。会報はとてものしみにしています。(旧姓 長沼)

(S23年松卒 大野 順子)
○会報12号恩師松崎先生の記事を涙ぐんで読みました。映画鐘の鳴る丘を見に行ったこと思い出しました。同

窓の津川さんの藤川先生の講演会のニュースも出席できなかった私には参考に (S25年梅卒 吉村 陽子)

○1・2年生の時お世話になった松崎濤子先生のお名前を会報で見つける度に、お元気でいらっしやることを実感し、なつかしさと喜びで満たされます。どうぞこれからも長生きなさって下さい。

(S32年月卒 新井 清子)

『平成22年度子ども達の活躍』

- 平成22年 6年生女子
- 第58回東京都学童水泳大会
- 6年 50m自由形 第1位
- 6年 50mバタフライ 第1位

『平成22年度の教職員移動』

- 退職
 - 教諭 上原 礼子
 - 教諭 林 起矢
- 転出
 - (横浜市立小学校教員へ)
- 副校長 立石 敬三
 - (大田区立六郷小学校 校長へ)
- 主任教諭 原 景子
 - (品川区立第四日野小学校へ)
- 主任教諭 川田 重久
 - (品川区立立会小学校へ)
- 教諭 島田 忠輝
 - (青梅市立第四小学校 主任教諭へ)
- 教諭 木村 絢子
 - (江戸川区立船堀第二小学校へ)

